

# 『封神演義』の演劇における展開

— 「黄飛虎反五関」を例として —

The Dramatization of "Fengshen Yanyi" :  
A case of "Huang Feihu fan wuguan"

中 塚 亮

Ryo NAKATSUKA

## 1. 序

『封神演義』は明代に成立した古典小説で、殷と周の王朝交代を仙人や妖怪の戦いをからめて描き、とりわけ後世の民間信仰に大きな影響を与えた作品である。その物語の伝播に当たっては、そのほかの明清小説と同様、戯曲や語り物などの芸能が大きな役割を果たしたと考えられる。

本稿では、『封神演義』が演劇作品においてどのような展開をとげたのか、「黄飛虎反五関」として知られる一段を中心に見ていく。

## 2. 『封神演義』における「反五関」

本稿で中心人物としてとりあげる「黄飛虎」は元々殷の「鎮国武成王」の職にあり、「文には太師聞仲あり。武には鎮国武成王黄飛虎あり。文は以て邦を安んずるに足り、武は以て国を定むるに足る」といわれるように、太師聞仲と並んで殷を支える重臣であった<sup>1)</sup>。しかし、九尾狐と入れ替わった妲己が宮中に入り、紂王を惑乱し暴虐に走らせ、ついには黄飛虎の妻の賈氏と妹で紂王の西宮であった黄妃を死に至らしめるに及んで、黄飛虎は殷に背いて周に身を寄せることになる。

その、黄飛虎が出奔に至るまで、及び周の

都西岐をめざして途中の五関を破る一段は「黄飛虎反五関」（以下「反五関」）などの名前で知られ、単独の戯曲作品にもなっている。

本章ではまず、おおもとである『封神演義』において、当該部分がどのように展開されていくのか、話の道筋が分かるよう前後も含めて紹介する。なお、括弧で示したアルファベットは5-2のプロット比較表に対応する。

紂王は「鹿台を作れば神仙や仙姫がおとずれる」との妲己の言を受けて鹿台を完成させる。妲己は、仙姫に化けたなかまの妖狐を鹿台に招き、紂王とともに宴を開き楽しむ。その正体を見破った垂相の比干は、途中で合流した黄飛虎らと手分けして、帰る仙姫のあとをつけすみかの軒轅墳につきあてる。そこで、比干と黄飛虎は火を焚いて妖狐を皆殺しにし、大いに妲己の恨みを買う。(A) [第25回]

正月になり、黄飛虎の妻賈氏は年賀の挨拶に妲己を訪ねる。妲己は摘星楼で紂王と賈氏を引き合わせる。紂王は賈氏に言い寄り、賈氏は貞節を守るため身を投げて自殺する。話を

1) 文有太師聞仲。武有鎮國武成王黄飛虎。文足以安邦。武足以定國。(『封神演義』第1回)『封神演義』のテキストは『古本小説集成』上海古籍出版社、1992、所収の内閣文庫本による。

聞きつけた黄飛虎の妹である西宮の黄妃が妲己と紂王を罵り打ちかかると、紂王は黄妃を摘星楼から投げ落として殺す。(B) 知らせを受けた黄飛虎は悩んだ末に反乱を決意、西岐に向かう。(C) [第30回]

聞仲の追撃を道德真君のたすけによりかわした(D) 黄飛虎一行は敵将蕭銀の寝返りもあり、第一関・臨潼関の張鳳を破る(E) が、第二関・潼関で陳桐の火龍標を受けて黄飛虎が死んでしまう。[第31回]

道德真君のもとで修行していた黄飛虎の息子黄天化が師の命で下山し、黄飛虎を生き返らせ陳桐を倒す。(F) 山に戻る天化と別れた一行は第三関・穿雲関で陳桐の兄・陳梧のもてなしを受けるが、これは罠であった。陳梧は深夜に火を放ち黄飛虎一行を始末しようとするが、黄飛虎の夢枕に立った賈氏の霊が危険を告げ(H)、一行は窮地を脱し陳梧を倒す。(G) [第32回]

第四関・界牌関の守将である黄飛虎の父・黄滾は黄飛虎の不忠不孝を責め、おとなしく縛に就くよう求めるが、黄明の策により関を焼かれやむなく反乱に加わることとなる。(I) 続く第五関・汜水関では、韓榮麾下の余化に黄飛虎以下敗れ囚われる。[第33回]

残った黄滾も降り、黄飛虎一行は朝歌に護送される。途中、太乙真人の命を受けた哪吒が一行を救い、黄飛虎らは無事五関を抜ける。(J) 西岐にたどり着いた黄飛虎は武王・姜子牙とまみえ、開国武成王に封じられる。(K) [第34回]

黄飛虎の殷から周への移動はある意味で、「天命」が殷から周に移ったことをもっとも象徴するできごとであった。それは「鎮国武成王」から、「開国武成王」への改号によく表現されている。また、そのことは「反五関」の直前の第29回に太公望に託孤し、文王が亡

くなるエピソードが置かれていることと繋ぎ合わせて見ることでより明確となろう。

そもそも黄飛虎の「武成王」という王号自体が、歴史的に見れば、唐の肅宗が太公望に授けたものである<sup>2)</sup>。張政娘は「黄飛虎」という名前も含めて、「武成王・姜飛熊」に由来するとみている<sup>3)</sup>。黄飛虎は確実に太公望のある部分を重ね合わせられた存在であり、武王はこのふたりの「武成王」に支えられるかたちで「命を革める」ことになる。

### 3. 「反五関」の成立—『武王伐紂平話』『列国志伝』における黄飛虎

続いて「反五関」が戯曲作品でどのように展開していくかを見ていく前に、「反五関」がどのように成立したのかを確認していく。

『封神演義』が元の至治年間に刊行された全相平話『武王伐紂平話』（以下『伐紂平話』）と、明（嘉靖以前に成立）の小説『列国志伝』巻1を下敷きとして成立していることは、すでに先行研究の明らかにするところである<sup>4)</sup>。

『伐紂平話』では黄飛虎の反乱は次のように描かれる（『伐紂平話』巻中）。二階堂義弘氏の要約により紹介する<sup>5)</sup>。

ある日、紂王は宮中で一美人をみて言い寄る。それは南燕王の黄飛虎の妻耿氏であった。耿氏は紂王を無道の君と罵り、怒った紂王は耿氏を殺す。飛虎はこのことを知り、反乱を起こす。紂王は五名の

2) 己卯、以星文變異、上御明鳳門、大赦天下、改乾元為上元。追封周太公望為武成王、依文宣王例置廟。（『舊唐書』「本紀第十・肅宗・上元元年」中華書局、1975）

3) 張政娘「〈封神演義〉漫談」『世界宗教研究』1982年4期

4) 柳存仁「元至治本全相《武王伐紂平話》明刊本《列国志伝》第一與《封神演義》之關係」『和風堂読書記』竜門書店、1977.6

趙景深「封神演義與武王伐紂平話」『中国小説叢考』齊魯書社、1980 年

5) 二階堂義弘『封神演義の世界』大修館書店、1998、pp.63-64

将、史元格・趙公明・姚文亮・鍾士才・劉公遠を差し向け、黄飛虎を討伐させるが、五人はかえって破れる。そこで、姜尚が飛虎討伐の任にあたることとなった。姜尚は計略にて飛虎をあっさりと捉えてしまう。捕らえた飛虎から、反乱の事情を知った姜尚は、かえって黄飛虎を解き放ってしまう。

このあと、黄飛虎は殷軍とたたかう周軍に参戦し活躍する（巻下）。『伐紂平話』と『封神演義』との大きな差異は、「反五関」のエピソードがないこと（その結果として、黄飛虎が反乱後すぐに周に身を投じるのではないこと）及び死なないことである。

一方、『伐紂平話』に遅れて成立した『列国志伝』には、黄飛虎の出番は見られない。ただし、姜尚が紂王の十罪を数える際に、罪の七として「その七、黄飛虎の妻を乱さんと欲して、君臣の綱を顛倒す」と挙げられている<sup>6)</sup>。『伐紂平話』でも同じ場面で「なんじ、黄飛虎の妻を醜にす、何の罪名かあらん、これ七過なり」と罪の七に挙げられているから、『列国志伝』が『伐紂平話』ないしその他の同様の内容を含む材料からそのまま取り入れたものと考えられる<sup>7)</sup>。作品中に登場しないにも関わらず、罪の内には数えられていることから、それだけ紂王が黄飛虎の妻に言い寄る場面が紂王の悪行を代表するものとして広く知られていたかわかる。その一方で、「反五関」に関わる描写は見られず、現存しない元雑劇二作品においても「反五関」への発展は起きていなかったのではないかと考えられる。もし、「反五関」がすでに成立していたのならば、『列国志伝』で黄飛虎の登場を全面的に削ってしまうということはあるまい。

以上から、「反五関」のエピソードについては、『伐紂平話』中に見える史元格ら五将

による討伐を黄飛虎がしりぞけるエピソードを改編するかたちで、『封神演義』が創作したものと考えられる。なお、「反五関」創作に当たっては、『三国演義』第27回に見られる、関羽が五つの関を破り六将を斬る「千里走単騎」「過五関」などと呼ばれるエピソードを参照した可能性が高い<sup>8)</sup>。根拠としては、五つの関を破るという点及び、ともに関に宿った際に焼き討ちの罟を仕掛けられる展開（『封神演義』では穿雲関で陳梧により、『三国演義』では滎陽で王植により）が組み込まれている点の一致が挙げられる。

#### 4. 「摘星楼」

『封神演義』成立以降、最初期の戯曲作品のひとつに「摘星楼」が挙げられる。

「摘星楼」の作者を、『伝奇彙考標目』別本227では劉百章とする。劉百章については、原籍が浙江の樂昌で江蘇の呉県に住んでいたことしかわからず生没年も事跡も知られない<sup>9)</sup>。ただし、同書所録の作家で生没年が最

6) 其七、欲亂黃飛虎之妻、君臣倒綱。(巻一「太公遺計收五將」)『列国志伝』のテキストは、徳田武編・解説『新編陳眉公先生批評春秋列国志伝』1、ゆまに書房、1983 による。

なお、『列国志伝』中に黄飛虎に関する言及が見られることは、周博「『封神演義』の成書及其在明清時期的傳播研究」(広西師範大学碩士論文、2007 が指摘している。

7) 爾醜黃飛虎之妻、有何罪名、是七過也。(巻下)『武王伐紂平話』のテキストは、二階堂善弘研究代表「全相平話二種データベースの構築」(1999～2000年度日本学術振興会科学研究費奨励研究(A) //課題番号11710247)の内閣文庫蔵本影印画像及び電子テキストによる。(二階堂氏のwebサイト <http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~nikaido/pinghua.html> にて公開)

また、『武王伐紂平話』以外に殷周革命を取り扱った芸能作品としては、少なくとも元雑劇に趙敬天(文殷・文敬とも)作「渡孟津武王伐紂」(「夷齊諫武王伐紂」とも)・鮑天佑作「諫紂惡比干剖腹」(「摘星楼比干剖腹」とも)の二作品があったことが『録鬼簿』『太和正音譜』『元曲選目』により確認できる。ただし、ともにテキストは現存しない。(莊一拂編著『古典戯曲存目彙考』上海古籍出版社、1982)

8) 角田美和「南音『哪咤收妲己』『黄飛虎反五関』について：広東地方に於ける『封神演義』受容の一側面」『中国文学論集』28、1999 もその可能性を示唆している。

も遅いのは洪昇（1645—1704）頃であることから、その成立は遅くとも17世紀末～18世紀初頭までの間と比定できる<sup>10)</sup>。

「摘星楼」は全26折からなり、殷の鎮国武成王である黄飛虎が妻と妹の死により、殷に反して五関を抜けて周に帰する黄飛虎反五関から武王伐紂までを描く<sup>11)</sup>。

（上巻） [ ] で『封神演義』の該当回数を示す。×は該当する回がないことを示す。

〈第一折〉 あらすじ説明 [×]

〈第二折〉 正月のお祝いに群臣が紂王に謁見するが、その際に怪鳥が出現。不祥であるとして打ち落とそうとするが二羽の雌鳥は落とすも一羽の雄鳥は西へ飛び去る。[第30回]（ただし、鳥のエピソードはなし）

〈第三折〉 賈氏、黄貴妃に年賀のあいさつ [×]

〈第四折〉 紂王、賈氏に戯れ、賈氏節を守って自殺。怒った黄貴妃を紂王が殺す [第30回]

〈第五折〉 黄一族殷に反して朝歌を出る。怪鳥は黄家の運命の予兆とわかる [第30回]

〈第六折〉 杜元銑・梅栢諫死 [第6回] 楊任目を抉られ風にさらわれ消える [第18回]

〈第七折〉 黄飛虎、第一関、臨潼関・張鳳を倒す [第31回]

〈第八折〉 第三関、穿雲関・陳梧が罨に掛けるが賈氏が夢枕に立ち危険を告げ、難をのがれる（第二関、潼関・陳桐は既に破れたと説明） [第32回]

〈第九折〉 玉石琵琶精が化けた王玉媚を宮中に迎える [第26回]（『封神演義』では九頭雉鶏精の化けた胡喜媚に使われたエピソード）

〈第一〇折〉 黄飛虎一行、第五関、汜水関・余化に捕まる（「俺四関已出」として第四

関は略） [第33回]

〈第一一折〉 哪吒・黄天化登場。余化を殺す [第34回]

〈第一二折〉 黄飛虎、周に帰し開国武成王に任じられる [第34回]

〈第一三折〉 申公豹に唆されて金光聖母、汜水関・韓雄に味方し、金光神陣を敷く [第43回]

（下巻）

〈第一四折〉 周が伐紂の軍を興す。黄飛虎は青龍関、南宮适は葭萌関に別働隊を率いて向かうなど諸将に作戦を指示 [第67回]

〈第一五折〉 広成子が金光神陣を破るために下山 [第44, 46回]

〈第一六折〉 広成子が金光神陣を破る [第46回]

〈第一七折〉 帥府を周軍に取り囲まれ汜水関・韓雄父子が自殺。界牌関の外に通天教主が誅仙陣を敷いたとの報を受け姜子牙は諸仙人に出駕を頼む [第76回]

〈第一八折〉 黄飛虎軍が青龍関・陳奇と戦い黄天祥死す。続いて鄭倫と陳奇が戦い相討ちになり、共に陣没する [第74回]

〈第一九折〉 妲己と紂王が宴する [×]

〈第二〇折〉 呂岳が殷陣營に味方して穿雲関に瘟瘴陣を敷いて周軍を待ち受ける（描写は無いが誅仙陣・界牌関はこの時点で破れている） [第80回]

〈第二一折〉 哪吒・楊戩・黄天化・雷震子が瘟瘴陣に挑む。楊任が下山して呂岳を倒し、瘟瘴陣を破る [第80, 81回]

〈第二二折〉 妲己が若者と老人の髓の多寡を当て、実際に脛骨を砕いて確かめてみる

9) 「伝奇彙考標目」『中国古典戯曲論著集成』7, 中国戯劇出版社, 1959

10) 『伝奇彙考標目』別本所録作家について、および洪昇の生没年は『中国文学大辞典』天津人民出版社、「伝奇彙考標目」「洪昇」の項による。

11) 「摘星楼」のテキストは鄭振鐸編『長楽鄭氏彙印伝奇』1, 1933 所収のものによる。

[第89回] 周軍、孟津河を渡り八百諸侯と  
会合する [第94回] 妲己ら三妖が夜襲計  
画を立てる [第96回]

〈第二三折〉姜子牙は夜襲を予知しあらかじ  
め諸將を配置、三妖を捕える [第96-97回]

〈第二四折〉紂王自ら王師を率いて諸侯の軍  
と対峙。姜子牙は紂王の十罪を数える。  
六つ目まで数え、三妖の正体を明かした  
ところで紂王が逆上し戦闘になるが紂王  
は破れ退く [第95-96回]

〈第二五折〉摘星楼に紂王自焚 [第98回]

〈第二六折〉諸將をねぎらう宴を開く [第100  
回]

以上、大まかながらあらすじを記した。構  
成から言うと第12折までが「反五閔」の場面  
を描いた前半部、残りの第13折以降が周が弔  
民伐罪の軍を興し殷周革命を実現する後半部  
という様に分けられる。ただし前半が『封神  
演義』の第30回から34回の5回分に相当する  
部分を11折かけて描いているのに対し、後半  
部は残り14折でそれよりもはるかに多い分量  
を描かなくてはいけないため、大幅にアレン  
ジが加えられている。

例えば、『封神演義』では黄飛虎が周に帰  
した後、殷の周征伐軍が派遣され、それを凌  
いだ後で今度は逆に周が弔民伐罪の軍を興し  
攻勢に転ずる、という構成になるが、「摘星  
楼」では殷軍の周征伐部分がない。この部分  
は殷の太師聞仲との戦い、趙公明とその三姉  
妹との戦い、といったいずれも単独の戯曲作  
品としても成立している有名な場面を多く含  
んでいるが、それを削っている。

聞仲は第2折の時点で「聞太師尽命西岐」  
として既に陣没している（『封神演義』では  
第52回）。また、姜皇后・比干・商容といっ  
た『封神演義』でも「反五閔」の前に死んで  
いる重臣以外にも、微子は山谷に逃げ箕子は

囚われていることとする（『封神演義』では  
ともに第89回）。これにより黄飛虎は『封神  
演義』以上に、朝廷で並ぶものない、重責を  
ほとんど一身に担う重臣として描かれる。こ  
のことで黄飛虎の造反が殷にとってより大き  
な打撃として強調され、黄飛虎の赦免を諫言  
した杜元銑・梅栢が刑死し楊任が惨刑に逢う  
のと併せて殷が末期状態にあることを決定的  
に示している。

また、第四閔での黄滾との問答を削ってい  
るのが大きな特徴として挙げられる。本部分  
は、黄飛虎の「反」が不忠不孝であるか、と  
いう倫理的に微妙な問題を取り上げている箇  
所である。

張暉はこの黄飛虎と黄滾の問答における黄  
飛虎の「君が正しくなければ、家臣は外国に  
身を投じる。父が慈しまなければ、子は必ず  
対立する」ということばをとりあげ、ここか  
ら「忠の前提は『君が正しい』ことであり、  
孝の前提は『父が慈しむ』ことだとわかる。  
『君が正しくなく、父が慈しまない』事態に  
直面し、黄飛虎は造反を選ぶより他なかった  
のである。しかし、彼は道徳上、いかなる瑕  
疵もない。なぜならば彼は決して不忠不孝で  
はなく、紂王が彼が忠孝を実現することを邪  
魔したのであるからである」と述べ、忠の成  
立前提としての「君正」が成立しなければ造  
反してもそれは不忠ではない、という見方を  
読み取っているが、これは統治者から見れば  
なかなか危険な思想である。張暉もこのあ  
とに続けて「黄飛虎の立場は、側面からさら  
に文王・武王が兵を起し紂を伐つことの合  
法性を説明しているのである」と述べるよう  
に、ひとりの不忠不孝に留まらず、国の顛覆  
までも合法化する思想だからである。恐ら  
くは、「摘星楼」はこのような問題を回避す  
るために第四閔・黄滾の部分削除したもの  
と考えられる<sup>12)</sup>。

「反五関」に関わらない部分で言えば、黄飛虎が死なないという点も特徴として挙げられる。このことは「摘星楼」が「黄飛虎の受難→伐紂による仇討ち」という「黄飛虎物語」的視点を有しており、その貫徹のために黄飛虎を殺さなかったと考えられる。

ただし後半の伐紂の戦いにおいて黄飛虎はあまり目立った活躍をするわけではなくその視点が十分に発揮されているとは言い難い。後半で派手な役割を演じるのは哪吒や楊戩など元々『封神演義』で活躍する登場人物である。黄飛虎が「反五関」以降目覚ましい活躍を見せなくなるのは『封神演義』でも同様に、『封神演義』では専ら敵に捕まることでその強さを印象づけるだけの存在になっていく。恐らく哪吒や楊戩などの『封神演義』における中心人物を省いて後半まで「黄飛虎物語」にすると余りに『封神演義』から乖離しすぎてしまうとして調整したのであろうが、結果として焦点がぼやけてしまった。

以上のように、「摘星楼」は『封神演義』に比して、殷周交代の象徴としての黄飛虎を強調するとともに、比較的統治者寄りの性格を帯びた作品だと言える。

## 5. 地方演劇における「反五関」

### 5-1. 分布状況

次に、地方演劇における「反五関」の展開を見ていく。

まず、どのような劇種に「反五関」に相当する劇目が存在するか、『京劇劇目辞典』<sup>13)</sup>『京劇劇目初探』<sup>14)</sup>『車王府曲本提要』<sup>15)</sup>『明清传奇綜録』<sup>16)</sup>『中国梆子戲劇目大辞典』<sup>17)</sup>『秦腔劇目初考』<sup>18)</sup>などの劇目辞典を中心に調査した。なお、劇目としては別題含めて「反五関」「黄飛虎反五関」「黄沙嶺」「摘星楼」「過三関」「龍鳳劍」「黄飛虎迫反」「反朝歌」「黄飛虎」などが確認できた。

劇種については、便宜上地方別排列としたが、その劇種がここで項目として立てた地方内だけで演じられるというわけでは、決していない。たとえば、「江蘇」の劇種である「淮劇」は遠く寧夏にまで伝播し、当地で「反五関」は演じられているが、ここでは「淮劇」のルーツである「江蘇」に排列した<sup>19)</sup>。なお、当該劇種がどの地方に属するかは原則として『中国戲曲劇種手冊』に依った<sup>20)</sup>。これらは論者の目が届いた範囲内の資料によるので、これ以外の劇種へも広がりを見せている可能性は当然考慮しなければならないが、それでも少なくとも17の地域、29の劇種への伝播が確認できるわけで、「反五関」が有力な作品であった様子がうかがえる。

北京 京劇<sup>21)</sup>

河北 横岐調<sup>22)</sup>

山西 蒲州梆子・中路梆子・北路梆子・上党梆子<sup>23)</sup>

12) 又说：“君不正，臣投外国。父不慈，子必参商。”可见，忠的前提是“君正”，而孝的前提是“父慈”。面对“君不正，父不慈”，黄飞虎只能选择造反。但是，他在道德上没有任何瑕疵，因为他并非不忠不孝，而是对王阻碍了他实现忠孝。其实，黄飞虎的处境从侧面再次说明文王，武王起兵伐纣的合法性。（張暉「忠孝觀念與革命困境—《封神演義》中的忠孝與武王伐紂的合法性」『復旦學報（社会科学版）』2008年5期）

13) 曾白融主編『京劇劇目辞典』中国戲曲出版社，1989

14) 中国戲曲学院戲曲研究所主編『京劇劇目初探（增訂本）』中国戲曲出版社，1963

15) 郭精銳・陳偉武・麦耘・仇江編著『車王府曲本提要』中山大学出版社，1989

16) 郭英德編著『明清传奇綜録』河北教育出版社，1993

17) 『中国梆子戲劇目大辞典』山西人民出版社，1991

18) 陝西省芸術研究所編『秦腔劇目初考』陝西人民出版社，1984

19) 中国戲曲志編輯委員会・中国戲曲志寧夏卷編輯委員会編『中国戲曲志・寧夏卷』中国 ISBN 中心，1996.10

20) 李漢飛編『中国戲曲劇種手冊』中国戲曲出版社，1987.

21) 『京劇劇目辞典』『京劇劇目初探』『車王府曲本提要』『明清传奇綜録』

22) 『京劇劇目辞典』『京劇劇目初探』『車王府曲本提要』『明清传奇綜録』

23) 『中国梆子戲劇目大辞典』

陝西 秦腔<sup>24)</sup>（中路秦腔・東路秦腔・南路秦腔<sup>25)</sup>）  
 甘肅 甘肅秦腔<sup>26)</sup>  
 山東 山東梆子<sup>27)</sup>  
 江蘇 崑曲<sup>28)</sup>・淮劇<sup>29)</sup>  
 安徽 徽劇<sup>30)</sup>・青陽腔<sup>31)</sup>  
 江西 贛劇<sup>32)</sup>・高腔<sup>33)</sup>  
 福建 閩劇<sup>34)</sup>  
 廣東 粵劇<sup>35)</sup>  
 廣西 桂劇<sup>36)</sup>・邕劇<sup>37)</sup>  
 湖南 湘劇高腔<sup>38)</sup>・祁劇<sup>39)</sup>・辰河戲<sup>40)</sup>  
 湖北 漢劇<sup>41)</sup>  
 河南 豫劇<sup>42)</sup>・大弦子戲<sup>43)</sup>  
 四川 川劇<sup>44)</sup>  
 雲南 滇劇<sup>45)</sup>・雲南梆子<sup>46)</sup>  
 貴州 安順地戲<sup>47)</sup>

## 5-2. プロットの比較

続いて、実際のテキストを見てみる。ここではテキストを入手できた以下の8種について比較を行う。また、参考に『封神演義』、伝奇「摘星楼」も併記する。表中の数字は『封神演義』は回数、その他は折・出数である。なお、括弧で示したアルファベットは2で上述した『封神演義』のプロットに対応する。

- ・中路梆子（山西） 「龍鳳劍」<sup>48)</sup>
- ・高腔（江西） 「反五関」<sup>49)</sup>
- ・閩劇（福建） 「黄飛虎迫反」<sup>50)</sup>
- ・桂劇（広西） 「龍鳳劍」<sup>51)</sup>
- ・邕劇（広西） 「黄飛虎反五関」<sup>52)</sup>
- ・辰河高腔（湖南） 「打楼逼反」<sup>53)</sup>（連台本「封神」第四本）
- ・湘劇高腔（湖南） 「龍鳳劍」<sup>54)</sup>（連台本「封神伝」第四本）
- ・安順地戲（貴州） 「黄飛虎怒反朝歌」<sup>55)</sup>（不分回）

24) 『京劇劇目辞典』『京劇劇目初探』『車王府曲本提要』『明清伝奇綜録』  
 25) 『中国梆子戯劇目大辞典』『秦腔劇目初考』  
 26) 『秦腔劇目初考』  
 27) 『中国梆子戯劇目大辞典』  
 28) 『車王府曲本提要』・  
 29) 『中国戯曲志・寧夏卷』  
 30) 『京劇劇目辞典』『京劇劇目初探』『車王府曲本提要』『明清伝奇綜録』  
 31) 中国芸術研究院戯曲研究所普通書目録  
 32) 『明清伝奇綜録』『車王府曲本提要』『京劇劇目初探』  
 33) 江西省都昌県高腔劇団演出『反五関』北京宝文堂書店, 1959  
 34) 福建省戯曲研究所編『福建戯曲伝統劇目選集』8（閩劇）, 1963  
 35) 中国芸術研究院戯曲研究所普通書目録  
 36) 広西僮族自治区文化局戯曲工作室編『広西戯曲伝統劇目彙集』2（桂劇）, 1960  
 37) 広西僮族自治区戯曲工作室編『広西戯曲伝統劇目彙集』43, 1962  
 38) 湖南省戯曲研究所主編『湖南戯曲伝統劇本』29-30, 1982  
 39) 中国戯曲志編輯委員会編『中国戯曲志・湖南卷』文化芸術出版社, 1990, p.77

40) 張子偉主持発掘・向栄, 陳盛昌資料発掘『湖南省瀘溪県辰河高腔目連全伝』（民俗曲芸叢書）施合鄭民俗文化基金会, 1999.12  
 41) 『京劇劇目辞典』『京劇劇目初探』『車王府曲本提要』『明清伝奇綜録』  
 42) 『京劇劇目辞典』『京劇劇目初探』『車王府曲本提要』『明清伝奇綜録』『中国梆子戯劇目大辞典』  
 43) 『京劇劇目初探』『車王府曲本提要』『明清伝奇綜録』  
 44) 『京劇劇目辞典』『京劇劇目初探』『車王府曲本提要』『明清伝奇綜録』『川劇劇目辞典』  
 45) 『京劇劇目辞典』『京劇劇目初探』『車王府曲本提要』『明清伝奇綜録』  
 46) 『中国梆子戯劇目大辞典』『秦腔劇目初考』  
 47) 帥学劍校注『安順地戯劇本選』（民俗曲芸叢書）施合鄭民俗文化基金会, 2004  
 48) 山西省文化庁戯劇工作研究室編『山西地方戯曲匯編』11（中路梆子專輯3）山西人民出版社, 1984.4  
 49) 江西省都昌県高腔劇団演出本『反五関』  
 50) 『福建戯曲伝統劇目選集』8（閩劇）  
 51) 『広西戯曲伝統劇目彙集』2（桂劇）  
 52) 『広西戯曲伝統劇目彙編』43  
 53) 『湖南省瀘溪県辰河高腔目連全伝』  
 54) 『湖南戯曲伝統劇本』29-30  
 55) 『安順地戯劇本選』

	演義	伝奇	中路	高腔	閩劇	桂劇	崑劇	辰河	湘劇	安順
黄家宴	×					1			1	
天化 弟子入り	×					2-3			2-3	
狐女と宴 ～退治(A)	25					4-7	1 -10	1	4-8	
比干挖心	26 -27					8 -12	11 -16	2 -5	9 -14	
薑盆	17				1-5					
賞牡丹	28				6-7					
黄家元旦	×				8	13	18	6	15	
賈氏を陥 れる企み	30				10	12	17		14	
賈氏, 黄妃 を訪ねる	×	3			9	13	19		16	
賈氏夢兆	×				8			6	15	
墜楼 (B)	30	4		1	10	13	20	7	17	
報告～反乱 (C)	30	5	1-2		11	14	21 -23	8	18 -19	
紂王と 対峙	31		3-4		12					
聞仲追撃 (D)	32		5-6	2 殷破敗	13-16					○
一関 (E)	32	7 張鳳		3 張鳳		14 張奎	23 張奎		20 張鳳	張鳳
二関 (F)	32			4 陳桐		15 黄滾	24-25 黄滾		21 陳桐	陳桐
三関 (G)	32	8 陳梧				16 陳桐	26-28 陳桐		22 陳梧	陳梧
賈氏幽霊 (H)	32	8				17	29		22	○
四関 (I)	33			5 陳良		17 陳梧	29 陳梧		23 黄滾	黄滾
五関 (J)	33 -34	10-11 余化		6 余化		18 余化	30-33 余化		24-25 余化	韓榮 余化
周に入る (K)	34	12		7		19			28	

※人名は守将



以上のプロットの比較からわかることとして、

- ① 比干が妲己に陥れられるエピソードと合わさっているものが見られる。（桂劇・崑劇・辰河高腔・湘劇高腔）

元々、本エピソードは元雜劇にも「諫紂惡比干剖腹」なる劇目が見られるように広く人口に膾炙したものである。賈氏・黄妃の惨死と続けることでより妲己の残酷さが際だつ点、また、比干と黄飛虎はともに妲己のなかまの妖狐を焼き殺した恨みにより陥れられるという連続性を持つため、合わせて演じることでより話に一貫性が出る、ということも挙げられよう。

- ② 黄飛虎が反乱を起こすところまでとして、五関を抜ける場面を描かないものが見られる。（中路梆子・閩劇・辰河高腔）

これらの作品では黄飛虎が造反するべきか否かを迷い、決断する場面に重点が置かれている。そのために、決断後の反五関を省くことで重点部分を際立たせ、冗長さを避ける（あるいは上演時間を短縮する）目的があると考えられる。

これは逆に決断を導く賈氏・黄妃の墜樓の部分を描かない中路梆子・高腔（江西）・安順地戲にも通じる特徴だといえる。

また、造反の決断に焦点を当てている点は、上述の「摘星樓」が黄滾のエピソードを避けたのと逆の方向を向いている。これはこれらの地方演劇が伝奇よりも恐らくはより民衆寄りの層に享受される性格を持つためであろう。（ただし、不忠不孝問題を「決断」部分で描いているために、黄滾の部分は比較的簡略に描かれる傾向がある）

- ③ 妲己が、賈氏を紂王に会わせるようあらかじめ企て罫にはめる。（桂劇・湘劇高腔）

『封神演義』では、妲己が賈氏と酒を飲んでいるところに紂王が偶然訪れ、そこで妲己が紂王にあとで賈氏を摘星樓に連れて行くから来るように、と、その場で取り決めるが、桂劇では「陛下が（賈氏を）御覧になりたいのでしたら難しいことはありません。元旦に文武大臣の妻は宮中に元旦のお祝いに来させればそのときに御覧頂きましょう」と、あらかじめ示し合わせて、賈氏を誘い込むかたちをとる<sup>56</sup>。湘劇高腔でもほぼ同様であり、ともにより一層妲己の悪辣さを際立たせている。

また、桂劇と湘劇高腔、及び崑劇は本部分以外にも、全体的にプロットがかなり近似している。桂劇と崑劇は広西省、湘劇高腔は湖南省の演劇であり、隣接省の関係にある。恐らく、何らかの伝播関係にあるものと考えられる。

## 6. 結び

本稿では、「反五関」に関して、そのおおもとなった『封神演義』、初期の演劇化作品である「摘星樓」、そして地方演劇においてどのように描かれているか比較を行い、それぞれの特徴を明らかにするべく試みた。

今回は特に地方演劇作品に対する分析が、プロットレベルでの比較に留まっており、今後はより文辞・曲辞レベルでの比較を進めることで、相互関係の調査を進めていく必要がある。また、「反五関」以外の劇目において同様の比較を行う必要も見えた。

ここで一つ確認しておかななくてはいけないのは、『封神演義』以前にあった、黄飛虎が五将の討伐を受けるという展開を見せる作品がまったくその後存在しない、という点である。『封神演義』は『武王伐紂平話』や『列

56) 主上要看，这也不难，设下元旦佳节，要文武大臣之妻，进宫庆贺元旦节，那时主上就得见了。

国志伝』といった先行する作品の影響下に成立したが、『封神演義』の完成以降は『封神演義』が演劇化などの際の基盤となり、恐らくはそれまでに存在したであろう、『封神演義』とは異なる展開をもった殷周交代故事は姿を消してしまった。このことは『封神演義』

という作品の影響力の大きさを再確認させる。しかし、これが「反五閔」以外においても同様の状況であるかはわからない。『封神演義』に見られない展開・変化を見つけることで、殷周交代故事の古態が見えてくる可能性も否定できない。今後の課題としたい。